学習院大学史料館
ミュージアム・レター
Gakushuin University
Museum of History
Museum Letter
No.52
発行日 ● 令和5年(2023)12月20日

学習院大学史料館所蔵 ブライス関係資料について

昭和天皇による「人間宣言」の起草者の一人として知られる日本文学研究者・レジナルド・ホレス・ブライス(1898－1964)は、昭和21(1946)から39(1964)年の間、学習院、学習院大学の英文科教授として学生の指導にあたりました。

ブライスの教え子で元本学英米文学科教授の荒井良雄氏のお声がけがきっかけで、当館では2013年にブライスのご遺族より、ブライスが晩年住んだ大磯の自宅(4頁下写真)に保管されていた資料をご寄贈いただきました。

またその後、関係者からも資料を受贈し、現在ではブライス関係資料として1155点を所蔵しています。禅や俳句にまつわる著書や旧蔵書、自筆原稿、新聞・雑誌の切り抜きのほか、試験答案等の学習院関係史料、家族との書簡や写真、京城帝国大学時代に親しんだチェロの楽譜、衣類、自転車に乗る時に教科書を包んだ風呂敷等の愛用品、肉声が収録された聴覚資料と多岐にわたります。

これらはブライスの業績のみならず、激動の時代において“日本に住み、日本文化を探求した英国人”として歩んだ彼の人生をも伝える貴重な資料です。

学習院大学史料館 学芸員　冨田ゆり

教壇に立つブライス　1950年(昭25)頃

ごあいさつ

学習院大学史料館は、中世以来の公家・地下官人や、近世から近代の大名・華族、大名家家臣等の史料に加えて、学習院大学の関係者についても史資料を収集し、調査研究をおこなっています。その活動の一環として、第二次世界大戦後間もない頃から学習院大学文学部教授を勤めたレジナルド・ホレス・ブライスについて多数の史料を所蔵しています。今回のミュージアム・レターでは、ブライスを直接知る方々による思い出や、日本文学研究者としての功績を紹介する内容となっています。人物に関する史料の研究は、単にその人柄や業績を解き明かすだけでなく、生存当時の文化・歴史の軌跡を紐解くことにつながります。本号を読むと、ブライスが日本文学研究者として進めた俳句や禅の研究が、戦後日本の体制や本学の存続に影響していた可能性にまで思いを巡らせることができます。激動の時代を生きた外国人教授と人々の交流をご堪能ください。

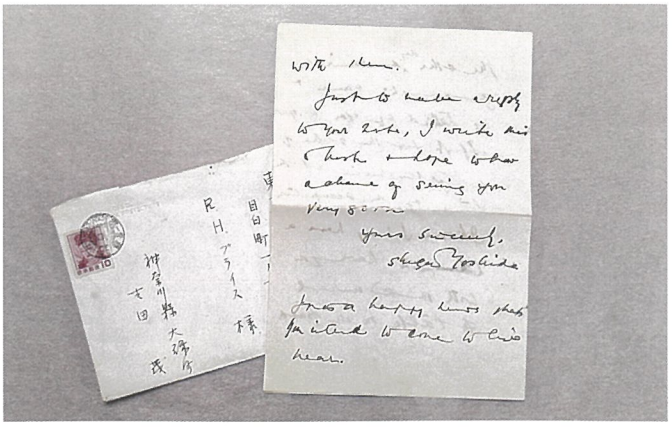
史料館長　狩野直和

ブライス先生

学習院名誉院長・元国連大使　波多野　敬雄

ブライス先生は日本文学を、そして日本を愛し二十六才で来日して六十五才で没する迄殆んど日本を離れなかった。その間第二次大戦で物資も払底する中も帰国することなく、英国人即ち敵国人として抑留生活も経験し、日本の敗戦後には学習院旧制高等科の英語教師になった。ブライスさんは夫人が日本人で日本語も充分こなしたが授業では一切日本語を使わない。敗戦直後のことだから、私のクラスの学生達は外国人と接するのは初めてで、ブライスさんの云うことも理解出来ない者が多かった。しかしブライスさんは面白い教科書を選びユックリ、ユックリ発音し、ジェスチャーも交えて生徒を笑わせたりして退屈させなかった。英語は判らないけれどブライスさんの授業は楽しみだという学生が多かったのは不思議とも云える。そしてブライスさんの話が理解出来るようになりたいというのが、英語を勉強する動機にもなっていたように思う。私は学校制度が旧制から新制に切りかわる時の新制最初の年だったので、ブライスさんには一年間週一回しか習うことが出来なかったのが残念であるが学習院学生時代の良き思い出である。

ブライスさんについて忘れてはならないのは学習院という学校の存続についての貢献である。終戦の時、私のクラスは山形県の鶴岡に疎開していたが終戦の報をラジオで聞いた後、引率の先生が「これで学習院という華族の教育を主目的とする学校の存続は許されないことになるかもしれない」と云ったのを記憶している。事実占領軍(GHQ)の中には学習院の存続に疑問を呈する者もあったという。その際ブライスさんはGHQの幹部と日本文学特に俳句を通じて親交を結び、外務大臣吉田茂の依頼により日本政府とGHQの連絡役も務め、皇室の存続、そして学習院の存続につき力を尽くしたことを付記せねばならない。ブライスさんは、いま鎌倉の東慶寺に眠っている。



吉田茂からブライスに宛てた書簡　1959年(昭34)9月17日付
占領期にブライスが学習院のために尽力したことが書かれている。
のちに吉田の援助によりブライスの著書*HAIKU*(『俳句』)全4巻が出版された